

推しハメ！

絶対ナイシヨのアイドル極秘誕生会の真相

試し読み版

妄想虜囚

目次

第一部	推しアイドルの誕生会に誘われた夜	2
第一章	アイドルがファンとつながったら軽蔑しますか？	3
第二章	アイドルと秘密が守れますか？	9
第三章	アイドルとイメージプレイしてみませんか？	21
第四章	お〇〇〇〇に囲まれたらアイドルだって興奮します	42
第二部	夜会の真相、そして――	67
第五章	アイドルだって誕生日にオトナになりたい	68

第一部 推しアイドルの誕生会に誘われた夜

第一章 アイドルがファンとつながったら軽蔑しますか？

1.

西宮里英は田中和馬のイチオシアイドルだ。

年齢十九歳、担当カラーはイエロー。

メジャーなアイドルグループの名前をいくつか知っているという程度だった和馬だが、里英をひと目見てファンになった。里英が売り出し中のアイドルグループ、セルフフィースパークの候補生に選ばれたというSNS投稿が、仕事に疲れ切った和馬の目に入った。

あれこそ運命の瞬間だった。彼女の自撮り写真を見たとき、まさしく閃光が瞬いた。

アイドルとして羽ばたこうとする里英を和馬は全力で推した。里英は期待に応え続け、そして見事に羽ばたいた。彼女が夢を実現させていくのは和馬にとって大きな喜びだった。会社に入って間もない頃、先輩社員の理不尽なしごきに耐えられたのも里英の癒やしのおかげだ。

和馬はいま二十四歳。熱心なアイドルファンになった和馬は就職して以来の給料の大

半を里英につき込んでいる。

ひと目惚れした美貌は言うまでもなく、里英は推すに値する女の子だ。十八歳でのデビューはアイドルとしては決して若くないが、ずっとアイドルになるために努力してきたという彼女の言葉に偽りはなかった。上京した里英は大学に馴染めず中退し、そのぶんアイドル一本に絞ってますます精力的に活動している。

セールスポイントと自らアピールするだけあって歌唱力は抜群だし、ダンス技術も最初こそ独習の癖が目立ったが、人一倍の努力で矯正した。セルフフィースパークの他のメンバーとの息もぴったりだし、細部まで心が配られていて指先の動きだけを見ても里英だとわかるほどだ。アイドルになったときを夢に見るほどイメージトレーニングしてきたというMCも絶妙で、笑いをとり、涙を誘い、ときには暴走気味のファンをいさめる。セルフフィースパークのライブでは悪乗りするファンもいなくなった。「最も治安のよいグループ」、「安心して推せるアイドル」などと里英が加入して以来、SNSでの評判もうなぎ登りだ。

西宮里英は順調にステップアップし半年で正規メンバーになり、いまではセルフフィースパークに欠かせない存在となっている。

里英のトップオタを自認する和馬だが、一週間ほど前に彼女を裏切るようなことをし

てしまった。

《まだバースデーイベの日程が決まらないのか、りえにゃんの誕生日祝わないつもりかよ。許さんぞ》

と、SNSで投稿してしまった。

誕生日といえばアイドルの稼ぎ時なのだが、里英はSNSの更新も一時期はあんなに熱心だったダンス動画投稿や個人のライブ配信もこのところ控えめだった。停滞気味の推しアイドルの活動にいらだちがなかったとはいえないが、里英本人を批難するつもりは毛頭なく、スタッフの怠慢を指摘したつもりだった。

なにしろ彼女は次の誕生日ではたちを迎える。法定上の成人年齢は引き下げられたが、それでも私たちは人生の大きな節目、盛大に祝ってあげたいのは当然のファン心理だ。だが、里英はことあるごとにスタッフさんは家族も同然です、と公言している。聖母のように優しい彼女なのだ。責任感の強い彼女が傷つくとなぜ考えもせずに投稿してしまったのだろうか。

SNSの怖いところで、《男と乳繰り合って忙しいんじゃないの？》、などと捨てア力から煽るレスが入った。炎上と言うほどではないが失言に気づいて二時間後に投稿は削除した。まめな彼女はどうかやらその投稿を見ていたらしい。

《お知らせが遅くなってごめんなさい。里英のバースデーイベは四月開催で調整中です》
ややあって里英は涙顔の絵文字を添えて投稿した。彼女の誕生日、二月十九日から一

か月以上もあとになってしまふ。他のメンバーと合同で生誕祭をする方向で落ち着いたようだ。幾度か文面を微妙に修正して投稿しなおしたことから、和馬のつぶやきは彼女を相当動揺させたらしい。恐らくまだ調整中の内容をスタッフに掛け合っただけで、早めて告知したのだ。

バレンタインイベントの握手会では平身低頭で謝罪したものの、

「わたしは何も見ません。カズポンがわたしのことを大切に考えて、ずっと応援してくれて感謝しているよ。カズポンはわたしのはじめのファンだもんね」

いつもの優しい笑顔で里英にそう言われて罪悪感はむしろ強くなってしまった。

《里英です。突然ゴメンね。カズポンは絶対！絶対！絶対厳守の秘密を守れますか？》

里英の誕生日の三日前のことだ。ダイレクトメールが届いた。一年半ほど前にタイアップ企画のイベント用にメンバーごとに開設されたものの、PR用のいくつかの投稿以外まったく使われていないサブアカウントからだった。

文面から怪しさを感じる。事務所の監視から逃れるために休眠状態のアカウントを使ったのかもしれないが、いやいやまさかと思う。

セルフィースパークは事務所が厳しくSNSを管理していて、ファンへはいいね返しまで、リプも原則してはいけないルールになっている。ダイレクトメールなどもってのほかだ。

軽い気持ちで「了解です。秘密は絶対に守ります！」とすぐに返信を送ると、間を置かずには返信があった。

《本当ですね。守れなかったら絶交ですよ。出禁にしちゃいますから。明後日の夜、空いてますか？》

これも即レスで《全然ヒマです。りえにゃんのためなら何でもします。誰にも言いません》と送った。アカウントが乗っ取られ、誰かに悪用されているのだろうか？ 真面目に活動している里英がファンとつながるわけがない。九割方偽物に違いないだろうが乗りかかった舟、どんな怪しげな要件なのか最後まで聞いてやろう。

詳細が送られてきた。《絶対に秘密だけは守ってくださいね》、という一文とともに画像が添付されている。画像には手書き文字で場所や時間が指定されていた。地図までいいねいな手描きのイラストである。丸っこい書き文字は里英の筆跡にしか見えない。

【絶対秘密の誕生会】とタイトルが銘打たれ、どうしても来て欲しいこと、誰にも内緒にしてほしいことが書かれ、ハートマークやケーキのイラストがあちこちに描かれている。絶対秘密やナイショという文字は極太の赤色で繰り返し強調されていた。里英のチエキと見比べたが筆跡もハートマークの形も同じだった。

軽い気持ちで誘いに乗ったが明後日の夜といえは里英の誕生日直前だぞ。招待画像にも中央に大きくバルーンアートのようなポップな文字で、『20』と金色で描かれている。いたずらにしては手が込みすぎているのではないか。和馬はなんどもダイレクトメールを読み直した。

第二章 アイドルと秘密が守れますか？

3.

時刻は夜の十時。指定のあった場所に和馬はおもむいた。騙されてもいい。たちの悪い美人局つつもたせやカツアゲの類いだとしても――。空手をかじったことがあるし、足にも自信がある。面倒ごとになれば走って逃げればいいのだ。

果たして――。

地図の通りに目的地へ到着すると、そこはレンタルスペースだった。防音完備でパーティーもカラオケもオーケーと外の看板に宣伝文句が書かれている。指定時刻ぴったりに入ると、ならんでいたドアのひとつが開いた。ドアには暗証番号を入力するパネルが付いていたが気を利かせて内側から開けてくれたようだ。

里英だった。

間違えようもなく西宮里英本人がドアから出てきた。セミロングのまっすぐな黒髪、くりっとした大きい瞳、すっと通った鼻筋。ぽってりとした厚めの唇が印象深い。見つめられるだけで誰しも恋に落ちる正統派アイドル美少女――。世界で一番かわいいと本

気で信じている推しの美貌だった。

里英は白いドレスにケープコートを纏まとっていた。私服チエキ会にも参加しているが、そのときよりもずっと大人びた姿だ。ファッションには疎うとい和馬だが、恐らく高級ブランドものだろう。和馬にとっては里英が着ればどんな服でも輝いて見えるが、今晚は格段にゴージャスだ。ピンクのルージュも目元にラメが入ったメイクもばっちり。誕生日を迎えるに相応しい装いをしている。

警戒するあまり、古びたコートに普段使いのチノパンで来てしまったこちらが気後れしてしまう。

「うれしい、カズポン、ホントに来てくれた。わたし、誰も来てくれないかとドキドキで……」

里英は和馬の手を握って喜んでくれた。心の底からうれしそうだ。会うたびに輝きが増す彼女だが、今日は一段とかわいい。推しの笑顔で騙されたんじゃないかということここに来るまでの和馬の不安は吹き飛んだ。

「オレも来たよ」、「ゴローオジサンもね」

手を取り合って喜びに浸っていると後ろから声が掛かった。恐らくは和馬同様に半信半疑で辺りで様子を窺い、里英の姿を見てあわてて駆けてきたのではないか。大きく白い息を吐いている。

ひとりはゼロという通り名の若い男。

リーゼント気味の髪型でヤンキーが少し入っているが、セルフイースパークを知って更生したと聞いた。ライブでは里英に生涯を捧ぐと熱いコールがやかましい男だ。候補生時代から里英を推しているからファン歴もほぼ同じだ。グッズの交換も幾度かしており顔なじみである。

いまひとり、ゴローと名乗った中年の男は現場ではここ一か月ほど前から見かけるようになった顔だ。現場だけが推し活ではないが、ご新規さんかなという印象がある。

気っぷ良く握手券を爆買いし、長いこと里英と話し込んでいたからよく覚えていた。ソフトモヒカンをかなり明るめの茶髪に染めている。現場に通うファンには推しに覚えてもらおうと奇抜な格好をする者は珍しくないが、四十を過ぎているであろうゴローにはいまひとつ浮いていて似合っていない。どんな基準で選ばれたメンツなのだろうか？ そんな疑問をよそに里英が入室を促した。

「こんな夜更けに呼び出して本当にごめんなさい。外は寒かったですよ、さあ早くなかに入って」

里英が身を翻すとフルーティな香水の匂いが広がった。握手会とは違う香水にも特別感が漂う。甘やかな匂いをたどって和馬は推しアイドルの後に続く。真冬の深夜だから外は寒い、白を基調とする十畳ほどのレンタルルームのなかは十分に暖房が効いている。

ケープコートで里英は脱いだ。胸元の大きなボタンが印象的な白いワンピースドレス。

銀糸が織り込まれていて上品に輝いている。肩口やスカート裾にはファーがあしらっていて、ノースリーブながら冬向けのドレスらしい。ポールハンガーにケープコートを掛けると里英は改めて挨拶した。

「お忙しいなかお集まりいただきありがとうございます。今晚はファンのなかから特別にお三方をお招きして誕生パーティーを開催しちゃいます。盛り上がっていきましよう！」

里英が拳を突き上げると、男たちもオーっと歓声を上げる。壁を見渡せば「Happy Birthday」と書かれたガーランドや、紙テープ、ハート型のバルーンで装飾されている。誕生日を祝おうとモードを切り替えねばと思うのだが、里英本人を目の前にしてもまだ信じがたくて声は上ずってしまう。

「さあ、みなさん座ってください」

里英が促した円形のテーブルにはカセットコンロに載せられた鍋があった。脇には鶏肉や長ネギ、白菜といった具材が大皿に載っている。水炊きのようだ。その横には肉じやがときんぴらがぼうが鉢に盛り付けられていた。手伝いのスタッフは見当たらない。里英ひとりで準備したのだろうか。

「わたしの手料理なんですよ。ケーキもあとでお出ししますから」

そう言って部屋の隅の冷蔵庫を指さす。鍋はぐつぐつと煮え、里英はダシ取りの昆布を取り出すと、具材を入れていく。鶏肉は地鶏で身の引き締まりも色合いも和馬が普段

食べているのとまるで違う。

わずか十秒、二十秒でもCDやトークチケットを買わないと話すこともできないのに推しの手料理を食べ、同じ鍋をつつけるのか。夢じゃないかと和馬は思う。

騙されているという疑念は完全には晴れていなくて、部屋の奥から他のメンバーや売れないお笑い芸人が飛び出て、「ドッキリでした」という声がいつかかかるのではないかと、いまだにビクビクしていた。だが、もうどうでもいい。ドッキリ企画だろうがなんだろうが推しとの幸福な時間を過ごそうという気構えになった。里英が菜箸を使って鶏肉を鍋に入れている姿を見ているだけで暖かな多幸福感に包まれる。

「いまいちど確認があります」

鍋の支度を終わると里英は改まって切り出した。

「まず、事前にお願ひしたとおり今日のごことは絶対に秘密です。誰にも言っけませんね？ スマホの電源も落としてください」

ここまで来て帰るヤツなどいるものか。真剣な里英の顔に一同はうなずきながら「もちろんです」と答える。電源の落ちた真っ黒なスマホの画面とひとりひとりの顔をじつと確認してから里英は続けた。

「ファンの方と事務所を通さずに会うのがいけないことだって里英もわかっています。でも今晚だけはゆるして欲しいんです。だってもうすぐわたし、はたちなんですもの。里英のわがままを聞いてください。だから絶対ナイショ」

そう言って唇に指を当てて。推しのいうことは絶対。こくこくとうなずく男三人に里英は言葉を続けた。

「わたし、男の人のこと知らないんです。上京して地元から離れちゃったし、大学も友達ができないまま中退しちゃったし、他のメンバーにだってこんな相談できないし——、本当にまったく……。だから親愛なるファンの方でも特に秘密を守ってくれそうなみなさんをお招きしたんです」

「男を知らないって、りえにゃんもしかして……」

和馬がそう言うのと里英は顔を手で覆って隠した。

「バージンってこと？」

デリカシーのないゼロがストレートに尋ねると顔を覆ったままうなずく。

「キスも？」とゼロが続けざまにたずねると、「キスもです」と怒ったような声で里英は答える。

「初恋で告白したらあっさり玉砕したのがトラウマになっちゃって恋愛に縁がないんです」

うそでしょう、男たちが口々に言うのを里英は首をブルブル横に振って強く否定する。

「もうあとほんのちょっとではたちなのは何も知らないって異常ですよね」

「そんなことないよ、ボクも童貞だもの」

「オレも、オレも童貞！」

和馬が打ち明けるとゼロも続く。

「オジサンなんかこの年で風俗ばかりだよ。恥ずかしながら素人童貞ってやつさ」
ゴローも臆面もなく女日照りをアピールした。

「わたし知りたいたんです。男のヒトのこと。ちゃんとした大人になりたいんです。里英に教えてくれますか？」

ようやく顔から手を離れた里英が言った。推しの頼みを断れるわけがない。

4.

「男のヒトってオナニーってどうやってするんですか？」

「わたしでヌイたことありますか？」

里英はド直球な質問を続けざまにぶつけてきた。答えにくい質問だが真剣なまなざしで見つめられると真面目に対応しないわけにもいかない。夏のグラビアすっごく興奮していまでも繰り返して使っているよ、とかキス顔で撮ったチェキに口づけしたことあるよ、などとオカズにした当人を前に答える。客観的にとても気持ちの悪いことをしている気になるが、里英は嫌がるどころか視線を逸らさずに聞いてくれる。わたしなんかの体で

うれしいです、とまで言ってくれます。

「オナニーする女の子ってキライですか？」

「週二でオナニーって多いですか？」

「エロマンガで興奮するのっていけないことですか？ AVも何本も見ちゃうんです」

里英は未熟な性の興味まで打ち明けてくれた。彼女なし、女友達さえろくにいない和馬に何が正しいのかわかりようもないが、伝聞だったりAV嬢のインタビュー記事でかじった情報を織り交ぜて、そんなことないよ、全然ふつうだよ、などと返事する。

ゼロが突然泣き出した。

「オレすっげえ感動した。読モやら俳優やらのカキタレになっちゃう子だって多いのに、りえにゃん本当にピュアなんだもん」

和馬も同じ思いだ。顔だけ、体だけという扱いをされてしまうのだろうか。タレントのなかでアイドルの地位は必ずしも高くない。幸せな恋愛をしてくれるならまだいいが、イケメン俳優やスポーツ選手にきちんと彼女扱いさえしてもらえない。テレビに出られるかどうか微妙なラインの芸人や、半分素人の読モにさえセフレ同然にやり捨てにされたアイドルの醜聞を耳にする。

エロマンガを読んで健全というのは奇妙だけれど、ゴシップネタで電撃引退されるくらいなら、自分で性欲や恋愛欲求を解消してくれたほうが安心できる。

里英のうぶな反応はどうかんがえても処女のそれだ。里英が真摯にアイドル道を邁進

していることに和馬も感動していた。

「カキタレってなんですか？」

心を打たれていると、きよとんとした顔で里英に問い質された。ゼロと顔を見合わせ
て思わず噴き出してしまった。

「りえにゃんは知らなくていいことだよ」

そう返事する。里英は心底純真なのだ。

現役のアイドル、それも推しと下ネタトークを交わすという信じられない時間はあつ
という間に過ぎた。聞き上手の里英につられてついついズリネタを熱く語るなど余計な
ことまでしゃべってしまった。里英はどんな話でも興味深げに聞いてくれて、神対応な
どという表現ではとても足りない。

素材が厳選された水炊きは昆布ダシに地鶏のうまみが効いていて、これまで食べたど
んな鍋よりすべての点でワンランクもツーランクもグレードが上だった。鍋料理の概念
が覆るほど次元が違う味わいだった。高価な材料をただ買い集めただけでなく、組み合
わせも吟味したに違いない。高級料亭にも負けない味を推しがよそつてくれるのだから
最高オブ最高である。肉じゃがやきんぴらごぼうもこれまたよく味が染みていてとても

美味しい。

ここに来る前に晩飯は済ませていたが次々と箸が伸びた。里英はシメの雑炊まで作ってくれて、それもひとくちひとくち噛みしめて平らげた。推しの手料理がもたらす至福に手を拝んで感謝していると、里英は冷蔵庫からケーキを運んできた。里英の担当カラーである黄色系のフルーツケーキだ。パイナップルや黄桃、オレンジが贅沢に盛り付けてある。「りえにゃん、これ今日のお礼」

頃合いとみてお金を入れた茶封筒と、小さな包みを差し出した。茶封筒には財布のなかの万券をすべて入れたが里英の心づくしの手料理には到底見合わないだろう。里英からの招待メールには「プレゼント不要、手ぶらで来てください、これも絶対！」などと書かれていたが、これなら邪魔にはならないとのセレクトだ。それを里英は両手で押し返した。

「いえ、今日は里英のわがままに付き合っていたんだから頂けません。いろんなお話が聞けて感謝してるのは里英のほうです」

どこまでも謙虚な里英にまた感動する。固辞する里英に、じゃあ、と包みから中身を取り出して言った。

「ここにいるあいだだけでも身につけてくれないかな」

和馬が取り出したのはネックレスだ。何度か応酬があったが里英は承諾してくれた。「カズポンが着けてもらえますか?」、里英は後ろを振り向くと髪の毛をよけた。白い

ドレスは背中が大胆に開いていてうなじから肩甲骨にかけてのラインがセクシーだった。そこで気づく。

童貞の和馬は女性にアクセサリを着けるのもこれが初めてなのだ。手が震えたが里英はじっと待ってくれる。幾度か試みてどうにかチェーンを留められた。

その様子を見ていたゼロも「オレも」と続く。ゼロのプレゼントはイヤリングだ。やはり女性は宝飾品がうれしいようで里英は踊るように姿見を確認した。胸元を飾る三日月型のジュエルが光るネックレスとピンクゴールドのイヤリングを「とってもかわいい」と喜んでくれた。お金は受け取ってくれなかったが、次のライブではグッズとチェキを倍増して買おうと心に誓う。

ささやかなプレゼントを贈るとそのときはやってきた。時計は十二時を指している。「りえにゃん、お誕生日おめでとう！」

パン、パンとクラツカが鳴る。カチンとグラスを合わせてシャンパンで乾杯した。

「初めてのお酒、甘くておいしい」

繰り返しになるがまったく信じられない夜だ。はたちの記念すべき誕生日を推しが迎えたその瞬間に居合わせられるなんて。終電はもうないがそんなことはどうでもいい。熱血漢のゼロは大泣きし、和馬ももらい泣きした。

里英はリップを塗り直すとスマートフォンを手にして記念撮影をする。一枚目は四人全員で、二枚目は自分ひとり。馴れた様子で手早く画像を加工するとSNSを更新し

た。アイドルしてる里英を直接見るのも新鮮だった。

《今日は里英のはたちの誕生日！ オシャレしたり鍋パしました。ぼっちなのでひとり鍋ですけれどね。お祝いメッセージ待ってます！》

スマホの電源を落としている男たちのためにSNSの画面を見せてくれた。添付した画像はもちろんソロ写メだけだ。顔の横には招待状にもあった手描きのバースデーケーキが添えられている。

「りえにゃんはぼっちじゃないよ」

和馬が言うと、この四人だけの秘密だよとも言うように里英はウインクした。ひとくちシャンパンを飲んだだけで酔いがまわっているのかほんのりと頬が赤い。

やはり推しは世界一かわいい。

第三章 アイドルとイメージプレイしてみませんか？

5.

「じゃんけんぽん、あいこでしょー」

こんな重大なことをじゃんけんなどで決めてよいのだろうか。邪心がないのが幸いしたのか、和馬はじゃんけんに勝利した。

『みなさん、もう少しお時間ありますか？ 口の堅いみなさんを見込んでお願いがあります』

推し本人が切り分けてくれたバースデーケーキを食べ終わり、楽しい会もお開きかと思いきや、里英は真剣な顔で告げた。

里英のお願い事とはキスの相手、それもファーストキスの相手をしてほしいというのだ。確かにキスも未経験とは言っていたがリップサービスではなく本当のことだなんて。

「ほ、ほんとうにボクなんかでいいの？ リードだってできないよ」

「いいんです。初心者同士のが照れないでしょう。わたしの突拍子もない質問も真面目に答えてくれて、カズポンが優しく素敵な紳士なんだと里英はよくわかりました。わたしの唇が他の人にうばわれてもカズポンはいいんですか？ 知らない人とするより知ってる人のほうがいい。わたしもカズポンのことよく知ってるし、ずっとわたしのこと応援してくれてたカズポンのが信頼できる」

里英にはドラマ出演のオファーも来ているらしい。オーディションに出てみないかというプロダクションからの誘い程度で、まだまだ具体的ではない遠い先だがキスシーンを程度をNG事項にしていたら役なんて勝ち取れない。顔だけを知っている俳優より気心知れたファンとのほうがいいと里英は力説した。

「カズポンが辞退するならオレがいただくぞ」

「おい小僧、こんなチャンス二度とないぞ」

ゼロとゴローにけしかけられ、里英の手を握った。里英もぎゅっと握り返してくれる。顔を近づける里英から甘い香りが押し寄せる。握手会では爽やかな柑橘系の香水を好んで付けている里英だが、今日はバニラ系の甘い匂いが漂ってくる。男殺しの香水に里英は最初からそんな決意を秘めて和馬たちを集めたのかもしれないな、などと思いなす。鼻と鼻がつきそうなほど距離が縮まると甘やかな香りはぐっと濃くなった。

「カズポン、好きだよ」

イチラブ妄想を和馬が定番のズリネタにしていることを里英は覚えていたようだ。和馬が望んでやまない言葉を投げしてくれる。そこまでされてはもう遠慮はできない。里英の肩を抱いた。

「和馬って呼んでよ」

本名を明かすと里英は「わたしのことも里英って呼んで」、そういつて笑顔を返す。

「和馬、わたしずっと前からあなたのことが好きだったの」

「里英、ボクもだよ」

ほんの数センチ、チェキでも密着しない距離に推しの美貌がある。里英が静かに目を閉じると和馬は引き寄せられた。ぷるっとした厚ぼったい唇に吸い付く。

里英の唇の弾力は想像を絶していた。思わず口をさらに突き出してしまう、カチッと歯を当ててしまった。ゴメンと平謝りすると、「もう一度」と里英のほうからキスのやり直しをしてくれた。

「ステキな思い出をありがとう。何よりの誕生日プレゼントだわ」

そういつてはにかむ里英が最高にかわいい。相思相愛の告白キス。和馬がなんども妄想した理想的なキスを里英と交わせるなんて。

「いっしょにキスを上達しましょう」

里英はまた口づけしてくる。なんていい子なんだろう。和馬もそれに応えるようにチュッと唇を吸った。

幸福の絶頂といった様子のふたりを、もういいだろうとゼロが引き剥がした。

「オレの名前は堀越零児っていうんだ。なあ頼むよ」

ゼロこと零児は何やら里英に耳打ちする。

「里英のこと助けていただいてありがとうございます。里英、零児さんにお礼したい」
零児にしなだれかかった里英が唇を合わせた。

ただキスができるだけでなく、妄想垂れ流しのドラマ仕立てのキスができるなんて――

里英は男の夢をかなえる天使なのか。零児も感激の面持ちだ。拳を握りしめてガッツポーズしている。里英を助けたヒーローという設定らしい。恐らく元ヤンらしい裏設定があるのだろう。里英がかっこよかった、とても強かったと称えて、零児はだらしなくニヤけている。しまりのない顔に里英は惜しげもなくチュツチュと唇を与えた。

「次はオジサンだ。オジサンは藪中吾朗。まあそのまんまだ」

ゴローこと吾朗は里英の背後に立った。ぼそっとこちらには聞こえない声でつぶやくと里英の顔が少し曇ったようにみえた。

「今晚のこと内緒にしてください。キスしますから」

吾朗は里英に後ろを振り向かせると朱唇に吸い付いた。唇を重ねるだけでなく舌をねじ込んでいる。肉体労働でもしているのか吾朗の手はがっしりしている。ゴツゴツとした手で肩を押さえ、上向かせたおとがいを掴んで唇を離さない。

(おいおいやり過ぎだろう)

危険な香りのするキスだった。吾朗が耳打ちしたのは弱みをにぎって困らせるというシチュエーションなのだろう。里英本人を前にしてはさすがにはばかれたが、和馬もそのようなズリネタも使ったことがある。男なら誰しも持つ欲望ではあるだろう。不安と同時に脳みそにズキンと来るような興奮も感じてしまい、里英に対して後ろめたい気持ちになった。

声を掛けるかどうか迷ううちに、キスを終えた里英が和馬に顔を向ける。

「和馬、好きだよ。わたしだけを見て」

あの甘美なキスがまた味わえるのか。すぐに不安はどこかに吹き飛び、里英を抱きとめて唇を重ねる。衝撃的すぎた最初のキスでは味わい切れなかった唇の弾力を味わう。里英の魅惑のリップは信じられないほど男を吸い付ける引力があった。チュツチュツとつえばむと自然に里英は舌を差しだした。チロチロとじゃれあう舌先が和馬に時間を忘れさせる。

額を寄せ合い、鼻の頭がつくほど顔を近づけて、ふたりは甘く囁く。

「和馬、生まれ変わってもわたしたちいっしょだよ」

「ああ、絶対里英を離さない。愛してる」

「うれしい。和馬、大好き」

唇が触れあえばすぐに舌を絡ませあうディープキスに変わる。

キスの循環が始まってから五周目だ。里英のキスはどんどん大胆になっている。幾度も交わして、口を重ねたり、舌をじゃれあわせたりするタイミングもつかめるようになった。ぎこちなさが消えて付き合って何ヶ月も経った恋人みたいだ。交際経験もないくせにそんなことを思う。

和馬のキスの経験は過去に一度しかない。放課後の教室にひとり座っていたところ、クラスで下から二番目ぐらいの女子が走ってきて、突然キスされた。ゴツンと額がぶつかってほとんどヘッドバッドだ。女子はウゲエ、と叫びながら教室を走り去っていった。どうやらそれは何かの罰ゲームだったらしい。

罰ゲーム扱いでされた最悪のファーストキス。苦いキスの記憶は完全に拭い去られた。夢のなかでしか経験のないラブチューを里英と交わしている。里英の舌はゼリーみたい

に滑らかで、こすれ合わせると溶けてしまいそうだ。里英をもっと知りたくて開いた口をすりあわせる。口腔のあちこちも舐めさせてくれるし、里英も舌を差し入れてくすぐるように舐め返してくる。和馬はじゃれあう里英の舌を吸ってやる。唾液がとても甘い。

「……ツ……チュツ、里英、たまらないよ。夢みたいだ」

「夢じゃないよ。和馬、もっとキスしよう」

いざなう里英が求めるままに深く舌を差し入れて、口と口を密着させる。さきほど食べたケーキの残り香につられて歯茎を舐めると生クリームの甘さまで感じられた。あの里英と同じものを食べて同じ時間を過ごしたんだ。そんな実感がまた湧いてきて和馬を有頂天にさせる。すべすべのエナメル質を滑る感触も心地よい。

「んふん、ウフンッ」

里英の吐息も情感豊かになってきた。キスの合間には、好きよ、と囁いてくれる。和馬にはそれがとても演技だとは思えない。指を絡め合い、ときどきぎゅーっと握って感情を伝えてくる。見つめ合う瞳にもハートマークが浮かんでいるようだ。里英の声は澄んでいて一音一音がはっきりと聞き取りやすい。声優にもなれそうな声質で、耳元で囁かれると脳みそがくすぐられるみたいなの快感がある。ゾワゾワして、まるでナマでASMRを体験しているようだ。

「もっともっと里英のことを見て」

見つめあったまま口づけをする。与えられたセリフではなく里英自身で紡いだ思慕の

気持ち。里英はどうしたらもっと好きになってくれるかをちゃんと考えて言ってくれ。言葉にすることで恋愛感情が高ぶっているだろう。もうきつと本心から里英は和馬のことが好きなんじゃないかと思う。和馬も里英が愛しくてたまらない。きつく抱擁すると里英の体温が伝わってくる。女の子の体はこんなにも柔らかいのか。身を預けてくれる彼女の重みが心地よい。元々ガチ恋気味だった和馬だがもう他のアイドルはもちろん、セルフィースパークの他のメンバーでさえ目に入らないだろうと確信する。

「オトナのキスをしてごらん、もっと舌を伸ばすんだよ」

里英の背後から男の音がする。

気になることがあるとすれば吾朗の存在だ。吾朗は黒子のように里英の後ろに張り付いて、ひそひそ声で指示を送っている。その声がときおり耳に入った。風俗通いだといっただけあって、恋愛はともかく女性経験は豊富なのだろう。回を追うごとに里英がキスを上達していくのは吾朗の指導もあってなのだが、どうもかんに障る。

「なあ、そろそろオレの番だろう」

零児が里英の手を引いた。

里英はすぐに零児との関係性に入り込む。里英のほうからしがみついて「たくましいわ」、「里英、強い人が好き」、などと細マッチョ気味のゼロの肉体を褒め称えた。ライ

ブチケツトが取れないときでも会場の外で応援旗を振り回している脳筋バカのゼロだ。有頂天になって喜んでいる。

キスが始まった。推しの言葉に勇気をもらった零児は自信たっぷり舌をねじ込んでいる。黒髪に手を差し入れてクシヤクシヤにかき回したり、頬を掴んで自分に向かせて濃密に唇を吸ったりもする。強引な力任せのキスを里英はそれでも受け止めた。指先でも称えるように肩や背中に手を回して愛撫している。零児に身を預けた里英はドレスの下で潰つぶれているのがわかるほど胸の膨らみを押し当てていた。

MCでも個別トーク会でも臨機応変に対応する里英は頭の回転が速いのだろう。鍋をつつきながらの下ネタトークでわかったが、妄想癖もありそうだ。何も言わずとも男が求める姿を演じてくれる。そして何よりうれしい言葉をくれる。

ここでも吾郎がちよっかいを出していた。里英の背後で尻を撫でている。

「零児さん、助けて。里英、痴漢されてるの」

「すぐに追っ払ってやるよ」

零児が手を払うと吾郎の手は引っ込んだ。すると里英は尊敬のまなざしでお礼を述べる。

「零児さん頼りになるわ。これからも里英のことずっと守って」

「ああ、オレに任せとけ」

零児はすっかりヒーロー気取りだ。里英のキスはますます積極的になった。零児はお

礼とばかりに差し出された甘い唇を好きなだけ吸っている。

そして順番は吾朗に回った。

「ほら、里英ちゃんからお願いするんだよ」

「ナイショにしてください、里英、いっぱいキスしますから」

吾朗とのキスは背徳的で異質だ。肌質も黒く、金色に近い明るい茶髪の吾朗はちょいワルオヤジといった感じで、傍目にも実際に悪い男に里英が引っかけかかっているという気にさせた。この夜の出来事を内緒にして欲しいのは本当だけに、里英もすぐに妖しい世界に引き込まれた。それに吾朗とのキスは和馬や零児がするのより常に一段進んでいる。

「ううん……ハア……チュツ、チュツ」

「そんなお子様のキスじゃオジサン約束はできないよ、舌をいっぱいまで伸ばしてみなさい」

ヌラヌラと舌を絡ませて里英はキスをするが吾朗は満足しない。里英は指を啜えさせられて首筋をしつこく舐め回された。口の隙間から、いやん、と声が漏れる。耳たぶを甘噛みされながらいやらしいことを吹き込まれているらしい。

里英の顔を上向きにすると、吾朗は顔を被せた。舌伝いに粘液が流れている。唾液を流し込まれているのだ。里英は為すがままで、喉が動き吾朗の唾液を嚥下しているのがわかる。後ろから伸びた手で乳房まで揉みしだかれている。

「ううん……ううん……」

弱みを握った中年オヤジにいいようにされているといった様相の里英からくぐもったなんとも悩ましい声が出ていた。嫌だけれどいいなりになるしかないといった里英の表情も真に迫っていて、和馬の胸が締め付けられる。

さすがにやめさせるべきか――。

けれども和馬は本心は別のところにあつた。あのめくるめく愛情豊かなラブチューをまたしたい、自分も唾液の交換をしたいなどと欲望に支配されているのだ。

7.

吾郎が里英の口を解放した。

「どうだい、里英ちゃん。はたちの記念だ。どれほどオトナになったのか見てもらおうじゃないか？」

「なあ、彼氏だつて見たいよな？ 我らがアイドルの立派に成長した姿を」

和馬は吾郎が何を言わんとしているのか虚をつかれたが、胸元を指す手つきで理解した。吾郎はドレスの胸元をさすって、見たいよなあ、と誘いを掛ける。

(里英を脱がすだなんて許されるかよ)

恋人同然のキスを交わして里英との距離感はぐっと縮まったが、西宮里英は和馬にとって絶対のアイドルだ。神聖視さえしている存在だ。いくらなんでもと和馬は留めるつもりで手を伸ばしたのだが、里英はその手を握って和馬に言葉を出させなかった。

「わたし、和馬さんに見て欲しい」

里英は握った和馬の手を胸元に導いた。とんでもないことしているという自覚はあるのだろう。ドクドクと鼓動が鳴っている。

「おい、里英に恥を掻かすなって。オレたちの手で見届けてやろうぜ」

零児はそう言うが目をギラつかせていてドレスの下が見たいという情欲が露わになっている。和馬も自分の気持ちをもうごまかしきれなかった。

——里英が望むなら。

里英の最推しファンふたりで胸元の大きなボタンを外していく。

ひとつひとつボタンが外れるたびにチラリと覗ける素肌が広がって、興奮が一段階ずつ上がっていく。ゴクリと息を飲みながらボタンをすべて外した。後ろの吾朗が肩口を抜いてドレスはストーンと落ちた。

「おお！」

心の底から嘆息する。里英はクリームイエローのランジェリーを身につけていた。黄色は単に里英の担当カラーというだけでなく、日頃から好きだと公言している色だ。里

英には黄色がよく似合う。シルクの光沢が眩い。ハーフカップのブラジャーからは想像以上に豊かな彼女の膨らみがこぼれんばかりだ。下半身はもっと悩ましかった。ハイレグのビキニショーツは切れ込みが深く、ガータベルトで白いストッキングを吊って太ももを彩っている。

「スゴすぎてなんて言ったらいいかわからないよ。キレイだ、セクシーだよ」

アイドルの華やかなランジェリー姿を絶賛した。首にはプレゼントしたネックレスが光っている。ゴールドのチェーンが大人びたランジェリーにきらびやかさを添えていてとても似合っている。

悩ましい下着姿にただただ圧倒された。

「じっと見てちゃ里英ちゃんが恥ずかしいだろう。キスしてやるんだよ」

吾朗に促されてまた里英とのキスが始まる。恥じらいを隠すように里英はすぐにキスに没頭した。和馬の手は自然と色合い鮮やかなブラに伸びる。男三人から間断なくキスを受けて里英の呼吸は荒くなっている。肉丘が上下していて、和馬が指を動かさずともムニユツとした柔らかな感触が味わえた。

「マーガレットの妖精みたいだ」

「ビーナスだって嫉妬するよ」

どう表現していいかわからなくて滑稽なほど齒の浮くようなセリフで里英の美しさを賞賛した。幻想的なアイドルのランジェリー姿を前にしながらそんな言葉しか出てこな

いのが情けない。でも里英はうれしそうにしてくれる。

恥ずかしげに呻くと里英のほうから口を塞ふさいできた。唾液を舌腹に載せて運ぶと、里英は吸ってくれる。同じように里英も唾液を与えてくれた。唾液交換キスマで応じてくれた愛しのアイドルは胸元をまさぐってもまるで嫌がらない。

ラブチューに夢中になりながらシルクとそれにも勝る里英自身の滑らかな肌の手触りを楽しんでいると、同じ衣擦れの気配があった。零児も吾朗も里英の柔肌を触っているのだ。

「アンツ」

里英が大きな声を出したので唇を離れた。胸元を見れば左側の肩紐が外されている。ブラが浮き、乳首がちよこんと覗けていた。零児はブラの隙間に指を伸ばして尖りの頂点を爪先でかすれさせていたのだ。

アイドルの乳房を暴く零児を咎めもせず、欲望のままに和馬も右のブラをめくってみた。ハーフカップのブラは少しずらすだけで頂点がみえた。

雪白の里英だが、乳丘の肌はさらに眩い白さだ。そこに赤いグミの実のような乳頭が乗っている。零児がしているように転がしたり、爪をめり込ませたりすると、長時間のキスで下地のできている乳首は反応を示し、押し込むたびに少しずつ飛び出してくる。里英と同じくなんと素直で可憐な乳首なのだろうか。

「おっぱい大きくなったんだろう？」

「最近、急に成長して……カップサイズが上がったの」

「いまは何カップなの？ Dはありそうだ、どう？」

「Eカップです。でももうきついみたい……ブラ買ったばかりなのに」

キスを引き継いだ零児があれこれ問い質している。和馬は里英の答えを聞きながら乳房を握った。色といいフンワリとした柔らかさといいいまさしくマシユマロバストだ。里英の水着姿は貴重で、和馬が目にしたのも半年前の夏に撮影されたグラビアだ。そのときより明らかに成長している。胸の谷間は深いし、隆起も豊かになっていた。その実物を自分の手の平で包んで実感している。

正統派アイドルの里英は均整のとれたボディラインが美しく、バストサイズで勝負をするタイプではなかったが、これなら本職のグラドルにも負けていない。次のグラビアで膨らみの成長ぶりが披露されればファンたちの喝采を浴びるだろう。

「ここまでするつもりなかったのに……どうしよう、わたしおっぱい見られちゃってる」

後からじわじわと異性に素肌を晒す羞恥がこみ上げてきたのか里英は顔を赤らめている。吾朗も手を貸してホックを外されたブラジャーが抜け落ちた。ここ最近急成長を遂げたバストは支えるクーパー靱帯が痛んでいないのか、高い位置にあって若々しく上向いている。ロケットのように飛び出ている迫力あるおっぱいだ。目が飛び出さんばかりに男たちは肉丘を凝視した。

「あんまりじろじろ見ないで……」

恥ずかしさを紛らわすように里英はファンにキスをせがんだ。

8.

もうキスの順番待ちをする必要もなくなった。男たちは里英の柔肌のあちらこちらにキスの雨を降らせている。吾朗は相変わらず背後が好みのようで、首筋や背中を舐め回している。そんなところも感じるらしく、里英は妖しく腰を揺すった。顔を上げれば、中年男はいやらしくアイドルに迫った。耳元によからぬことを吹きこんで、里英に困り顔させている。

「おっぱい吸っていいからナイショにしてえ」

その言葉より早く和馬と零児は左右から乳房を吸い立てている。唾液で光る尖りは乳首までぷっくりとして可憐さが増し、和馬はまた吸い付いた。ミルクのような甘い匂いがする。

チューチューと吸われて里英は甘くあえぎ、開いた口もまた吾朗に塞がれてしまう。それをいいことに和馬と零児はケーキを食べ終えた小皿から残ったクリームを乳首にま

ぶした。白く彩られた頂点から生クリームを吸い立てる。赤みが強めのピンク色の尖りはまた姿を見せて視覚でも味覚でも楽しませてくれる。

残らずこそぎ取ろうとした吸いつきようがほどよい刺激になったのか、乳首はさらに背伸びして里英の反応も鋭敏になった。

「なあ、ここも見ていいだろう」

遠慮の知らない零児がショーツの腰紐を弾いた。

(うそだろう、まさか……)

里英の肌はあちこちまさぐったが、神秘のデルタ地帯だけは和馬も触れていなかった。

和馬はこの成り行きを見守る。

「ダメです。そこは……」

「どうしてだい？　里英ちゃんはバージンなんだろう？　それとも本当はいつもこんなイケナイ遊びをしてファンの男ごころをもてあそんでいるのかな？」

吾郎がさらに追い打ちを掛け、零児も「ここを見せてくれたら信じるから」、などと迫っている。和馬も里英のすべてが見たいと天秤の針が振り切っていた。

里英も正常な判断力を失っているのか――。

しばしの逡巡のあと小さくうなずいた。

撤回のいとまを与えぬよう、すぐさま零児が腰紐をずらした。和馬も反対側から腰紐をずらしていく。ヒップのもっとも張り出したところを過ぎるとショーツはスルリと脱

げ落ちた。

「キヤツア」

里英は小さく悲鳴を上げた。黒い茂みが顔を出し、隠そうとする里英の両手を和馬と零児は反射的に掴んだ。

下腹部のラインも美しすぎた。縦長の形の良いへそ。ダンスで鍛えられた腹筋には真ん中にうっすら縦のラインが入っていて、それが女性のお腹特有のなだらかなカーブを明瞭にしている。シャンパングラスのように縦長に生えた縮れ毛は絡み合って下方につれて濃くなっており、かろうじて秘めたる部分を隠している。

男たちは腰をかがめた。下から見上げればピタリと閉じ合わされた肉の扉があった。「ああッ、もうッ、限界です」

里英がしゃがみ込んだ。膝を丸めて男たちの視線から腰を逃がす。

「なあ、里英、もっと見せてくれよ」

「頼むよ、里英エ！」

和馬と零児は情けない声をだしてすがりついた。里英が隠してしまった部分をもう一度のぞくために床に着くほど頭を低くして頼み込んだ。いざとなれば暴走気味の里英を切りの良いところでとめるつもりだったのに、そんな歯止めなどどこにも存在していなかった。いまは自分を抑え込むのに精一杯だ。

いや、違う。そんな取り繕った感情ではない。

——オマ○コが見たい。

——オマ○コが見たくてたまらない。

——西宮里英のオマ○コがどうしても見たい。

誤魔化しようがない劣情が渦巻いている。

「こんなに頼んでるんだからちよつとぐらいいいじゃないか」

言った自分でも驚くほど身勝手な言葉。土下座めいて頼み込みながら、傲慢な響きさえ漂わせている。

拒絶されたら、里英に何か恐ろしいことをしてしまう気がした。ドッキリ企画を疑っていたときは紳士的に振る舞わなければと自分に言い聞かせていたが、もうそんな可能性はない。邪魔な握手会の剥がしスタッフはいないのだ。

気づけば密室に裸身をさらした美少女を男三人が取り囲んでいる。なんだって思いのまま。欲望を望むままに果たせる危うい状況——。

きつと変身途中の狼男はこんな感覚なのだろう。理性が消えていき、代わりに獣欲が高まる。血流が一点に集中し、根源的な下半身の欲求に支配されていく。

そうだ、もう見たいだけではない。もう股間の昂ぶりをぶつけたくて仕方ない。処女かどうかを確かめる一番の方法。実際にハメて確かめると本能が命じている。海綿体が破裂しそうになるほど勃起し、こいつを使えと脳裏に声が鳴り響く。

ハア、ハア、ハア、ハア——。

男たちは押し黙り、凶暴な荒い呼吸が里英の周囲を取り巻いていた。

「みんなどうしたの……わたし怖いわ」

殺気だった獣性を感じて里英は膝を固く閉じたが、そんな美少女の怯えも男たちの凶暴性を煽った。

まるで極上の生肉を前にした犬のようだ。誰が最初に美肉にありつくのか――。

互いに獲物を狙う牽制がかりうじて暴拳を止めている。ファーストキスならいざしらず処女への一番乗りを誰も譲ろうとはしまい。血みどろの戦いとなっても里英が欲しい。力を入れて拳を固める。和馬も処女争奪の臨戦態勢に入っていた。

――一瞬の静寂が流れた。

若い男ふたりよりいくぶん理性を残していたのか、吾朗が声を掛けた。

「里英ちゃん見なさい、みんなすごくつらそうだ。忘れたのかい。男のことを勉強したじゃないか。見えるだろう、あれが男の欲望なんだよ。ほらオジサンのもこんなに堅い」
和馬も零児もズボンを破らんばかりに股間を突き上げている。吾朗も熱化したモノを里英の尻肉に擦りつけていた。和馬は猛り狂う肉欲が矛先に向かおうとするのを膝に爪を食い込ませて耐えた。零児もこめかみに血管を浮かばせて歯を食いしばっている。

「里英のせいなのね……」

臨界点すれすれの男たちのリビドーを目にして、里英ももうただ見せるだけでは済まないことを悟ったようだ。覚悟を決めて里英は続けた。

「おクチで……それで許して。わたしファンを裏切れない。バージンだけは守りたいの」

第四章 お○○○○に囲まれたらアイドルだって興奮します

9.

全裸の男三人が彼らのアイドルを取り囲んでいた。

一触即発の状況は里英が口唇奉仕を宣言することで和らいだ。

「ウウツ、スゲえよ、里英」

椅子に腰掛けた里英の右に零児が立ってオーラル奉仕を受けている。

細マッチョの体型に似て零児の男根は細身で長い。里英はそれに右手を絡めている。

椅子に腰掛けた里英はチュッチュツと粘液で濡れた亀頭にキスをしていた。間近で目にするのは初めてであろう男性器に舌を伸ばして形を確かめている。

和馬も零児もすでにいちどヌイてもらっていた。

零児は、もう我慢の限界なんだ、これだけは譲れねえ、と主張し、真っ先に奉仕を受けたが、一分と持たずに発射した。それは次にヌイてもらった和馬も同じで、手で扱われただけで発射寸前となり、口に含まれるなり暴発してしまった。零児のときもそうだったが、育ちのよい里英は床に吐き出せずに口いっぱいに出された和馬のザーメンを飲

んでしまった。

「男の扱いなんて簡単だろう。里英ちゃんがおクチでちよつとなだめてやればおとなしくなるんだから」

「ああん、わかりません……でも……」

椅子に片膝を載せた吾朗が里英の背後に半身をぴったりと寄せて、フェラチオの指導をしていた。里英は左手に吾朗の肉棒を握らされて、シコシコと扱きながら、その指示に素直にしたがっている。

室内は雄の匂いで満ち満ちている。ラブチューをしていたときからカウパーが出まくりで、トランクスを脱いだときは自爆していたかと思うほどグツシヨリだった。それは他の二人も同じだろう。股間からだけでなく脱ぎ捨てた下着からも雄の匂いが発散しているのだ。濃厚な性臭を嗅がされて思考回路が麻痺しているのか、里英はとにかく従順に男に奉仕している。吾朗が好き放題に乳房を揉みしだいても嫌がる素振りもない。

「里英ちゃんのかわいいおクチでしゃぶられたら男なんてイチコロだよ」

「ああ、ホントたまらねえよ」

「へへへ、そんなに里英ちゃんのおクチはいいのか？ ほら、里英ちゃん、オジサンとまたキスしようよ」

そう言って吾朗が里英のおとがいを掴んで唇を奪う。

「諸君、フェラチオの最中でもキスしてやるんだぞ。里英ちゃんのがんばりに報いてや

らねえと」

「オジサンのもあとでおしゃぶりしますから」

里英は吾朗ともういちど口づけをしてから、また零児への奉仕へ戻った。

和馬は里英の正面に陣取っていた。固くとじ合わされていたアイドルの膝は雄の匂いを嗅がされているうちに緩んでいる。押すとあっけなく脚が開いた。白いストッキングとガーターで額縁のように飾られている処女地は和馬にとっては至高の芸術品だ。食い入るようにそこを見つめた。

陰茎を頬張らされていた里英が視線に気づいて悲鳴をあげる。

「和馬、みちゃだめ、アンツ、舐めるのはもっとダメだよ」

「こんなにキレイなのにどうしてみちゃだめなんだよ」

香水でも汗でもない里英の体臭が漂ってきて、和馬は吸い寄せられた。自分でも知らぬうちに口をつけている。

「んああッ」

乙女の部分に触れられて、里英は大きく身震いした。手で和馬の頭を押しつけようとするが吾朗に遮られた。

「舐めあいっこするんだよ。大好きな彼氏なんだからいいだろう」

「ああ、でも……シャワーも浴びてないのに」

「オジサンだってシャワー浴びてないよ、零児くんだってそうさ。里英ちゃんだってシ

ヤワーを浴びてないチンチンをしゃぶったんだからおあいこさ。さあ、おしゃぶりを続けなきゃ」

男三人に責め立てられては里英も防ぎようがない。零児の陰莖で口を塞がれ、吾朗にはしつこく絡まれ、和馬には秘部を無防備にさらしてしまふ。

里英のそこはあまりにも繊細すぎた。唇とおなじようにぽってりとした陰唇が神秘の部分を守っている。キスよりも優しく――。精緻なガラス細工にさえ思える聖域を細心の注意を払って、氷を溶かすように舐めていく。

これが処女の女性器か。丹念になめていくと、固く閉ざした肉の花弁も少しずつほころ綻んできた。わずかに垣間見える小ぶりな小陰唇は形も整っておりくすみもない。洋物のポルノでしか見たことがない和馬に処女かそうでないかを見分けることなどできないが、こんなにも清らかなのだ。里英の純潔は保たれていると確信した。

「オレ、もう少しで里英を守れなかった」

零児の声が聞こえる。それは必ずしもヒーローぶったセリフではない。和馬もまったく同感だった。

里英が裸身を晒したとき、和馬の理性は吹き飛ぶ寸前だった。もし吾朗が口唇奉仕に誘導しなければ里英に襲いかかっていたに違いない。拒絶されたら里英の股を力尽くで

開かせただろうし、局部を見せてくれたにしても憧れのアイドルの女性器を前に忍耐な
どできなかっただろう。零児や吾朗に殴りかかってでもその一番乗りを争い、バージ
ンを奪いにかかっていたかも知れない。

それでは強姦も同然だ。

何よりも大切な宝物を自らの手で壊してしまうところだった。獣欲に任せるまま推し
アイドルの処女を無理矢理に奪ったところで、泣きじゃくる里英を見れば死ぬほど後悔
しただろう。

クチでヌイてもらわなければ取り返しのつかないことになっていたのは身に染みて理
解していた。

「吾朗さん、あんたのおかげだよ」

最悪の結果を回避しつつ飛び切りの快樂が味わえて、零児は吾朗の手並みに敬意さえ
いただいているようだ。里英のフェラチオ指導も的確なのだろう。二度目ということも
あるのだろうか、吾朗がときおりちよっかいをだして中断させているから、ずっと長い
時間アイドルの口唇奉仕を受けていられるようだ。

和馬は初めて直に見る女性器への好奇心を抑えて、里英に報いるべく努力した。一個
の機械になった気でこの芸術品のようなヴァギナを傷つけず、かつ里英に少しでも気持
ち良くなってもらおうと、やわらかく、やわらかく舌を動かす。

「ンふうんッ、ンンふんッ」

その甲斐あってかフェラチオに耽る里英の口からもぐもった声が漏れるようになった。和馬は舌に力を入れすぎないように、全神経を集中して神秘の部分をさらに美しくすべく、磨くように舐めていく。

「なあ……里英、頼む」

零児の限界が近づいているようだ。里英はスロートして快感の仕上げをしていく。零児が唸り声を上げた。見上げると里英はまた放たれた粘液を飲んでいく。

「オジサンじつは風俗に寄ってから来たんだよ。あとでじっくり楽しむから。さあ若者からどうぞ、どうぞ」

和馬の股間を一瞥して吾朗は順番を譲った。里英の秘部は男を奮い立たせる魔力を秘めているようだ。舐めているあいだに股間がギンギンに勃起している。零児と和馬がポジションを変えた。

「里英、またいいのかい？」

「遠慮しないで。里英のせいでおチンチンがこんなになっているのどうにかしてあげたいの」

痛いほど勃起した和馬の男根を里英は優しくさすった。里英のアソコを舐めるうちに自分でも経験がないほど先走りの汁を垂らしている。一度目もそうだったが、ドロリとした粘液を嫌がりもせず、鈴口に里英は口づけして清めてくれる。肉幹に舌を這わしてから、啜えてくれた。

ぽってりとした唇で扱かれる破壊力は尋常ではない。里英も数度の経験で自らの威力を理解したのか、二、三度往復させてはいったん離れて、腰回りの愛撫に切り替える。陰毛にこびりついた粘液も拭い取ってくれたり、太ももの内側まで舌腹を這わせてくれたり、あちこちに舌を伸ばしてくる。

「そうだ、やさしく、やさしく。和馬くんが里英ちゃんのオマ○コを舐めてくれたときのようにな。やさしくしてやりな」

吾郎のアドバイスに従って、里英は童貞の和馬には強すぎる刺激を周囲に散らして快感を持続してくれるのだ。初めての男への口唇奉仕も恋人気分のがいくぶん楽になるのか、キスのときのように「好きよ」と甘く囁き、間をつなぎながら愛撫を継続していた。零児がさかんに唸っていた理由がわかった。ただ精液を搾り取るのではない。じつくりと快感を高め、男が楽しむ十分な時間を与えてくれる。じよじよに高まった性感が爆発したときどれほどの快楽をもたらすのだろう。きっとセックス以上に気持ちいいはずだ。

男根と行き来させる里英の唇は、和馬の乳首まで舐めてくれる。それもまた気持ち良くてブルツと震えてしまう。吾郎が勧めたように里英とキスをする。熱したゼリーのよくな温かく蕩けそうな舌、こんな可憐な舌で献身的な奉仕をしてくれたのだと感激はまた高まった。

「里英、こんな気持ちいいの初めてだよ」

「おチンチンって不思議、こんな変な形なのに舐めてると愛しくなってもっとしてあげたくなるし、とつても興奮するの」

里英はそういったまた股間に顔を埋める。

「ほら、里英ちゃんのアソコがどうだったのか教えてあげなきゃ」

吾朗が合いの手をいれた。

「とつてもキレイで、すごくおいしかったよ」

「やんっ、恥ずかしいわ、和馬ったら」

里英が羞恥に顔を紅く染めると、こんどは零児が会話に割って入った。

「和馬の言うとおり、里英のオマ○コ、スゲえおいしいよ。オレのチンチンまたギンギンにおっ勃ってきた」

「もうっ、零児さんまで」

零児が腰を浮かせた。二度も出したばかりだというのに零児の股間は垂直にそそり立っている。

「そうだ。里英ちゃんは男のオナニーに興味があるんだったな。みんな見せてやろう」

吾朗の音頭で男たちは一斉に肉竿を扱いた。里英は顔を背けたがどこに向けても男性器に囲まれている。いちど見始めれば興味深げに男のオナニーを観察した。

「さあ、里英ちゃんもしてごらん」

「えっ、でも」

「大丈夫だよ、今夜のことはナイショなんだから、恥ずかしいこと全部経験しちゃいなよ」

「そんな、人前でなんて」

男三人がこれみよがしにシコシコすると、首を横に振りながらも里英の手は下に降りていく。驚くことに里英の指先はそのまま割れ目をなぞっている。勝手知ったる自分の秘処だけに指の動きは大胆だ。腫れ物に触れるようだった和馬や零児の舌遣いは焦れっただったのかもしれない。せき止めていた欲望を一気に解放したように縦溝をなぞっていく。

「すごい、アイドルがオナニーしてる」

「零児さんいわないで。アイドルなんかじゃないわ。いまの里英はただのエッチな女の子なの」

「大丈夫だよ。秘密の夜なんだから。ほら、いつも部屋でひとりですてるみたいにしてごらん」

吾朗は言うが、美しく整えられた里英の爪にはクレツセントのネイルシールが貼られていた。細い指先までもかわいらしい。三日月が浮かんだ指先がダンスを踊るみたいにくねらせてクリトリスをさする姿もアイドルを連想させるのだ。

「ああ、わたしのこと軽蔑しないで。オナニーする里英をキライにならないで」

「キライになるわけじゃないじゃないか。本当の里英を知ってもっともっと好きになったよ」

男たちの目はアイドルのオナニーショーに釘付けになった。熱視線に炙られて、推しアイドルの指先はますます活発に動いていく。縦裂のなかに指を埋没させて、肉花を掘り起こしている。

里英がどこをいじっているのかは和馬にも想像がついた。クリトリスを押しつぶしているのだ。かわいらしく触っているという程度ではない。グリグリと潰して自ら責めている。処女といえども女の肉欲がこんなにも深いのかと思いついた。

「ああ、そんなに見られたら、里英どんどんおかしくなっちゃうよ」

「今日は変なの。エッチな気持ち止まらない」

「どうしよう、わたしアイドルなおチンチンに囲まれて興奮してる」

里英は自らの言葉で興奮することまで覚えて、うわごとのように淫らにつぶやいている。没頭する指先は円を描いて激しくなった。清楚さを保っていた淫裂が綻びて、陰唇の肉ビラが覗けている。

アン、アア、とひっきりなしに里英は悩ましいあえぎを放った。ソプラノのハニーボイスが高まっている。歌声にも似た喘ぎ声まで和馬の思い描いたとおりだった。

「アアンツ、イツちゃう」

男たちに見守られながら、急ピッチで快感を急上昇させた里英はそのまま達してしまつた。顔を仰げ反らせて、誰の目にも明らかにアクメを貪ほろっている。快感の高みをさまざまよう里英は和馬が声を掛けるまで放心状態だった。

「最高にかわいいよ、里英」

ここがどこかを思い出したのか、はっとさせた里英は和馬の顔を見て、そして男たちの股間に視線を移動させた。

「里英のせいでまたこんなに。わたし責任を取ります。ぜんぶ里英のおクチに出しているから」

口唇奉仕を里英が再開する。オナニーショーを見せつけられて和馬が破裂寸前なことをすぐに里英は察してくれた。やさしくやさしく、唇を滑らす。

和馬は里英を見下ろした。

こんな淫らな光景があるだろうか。

下着を脱がされ、乳房も局部もさらけだした裸身。白いガーターとストッキングだけの妖しい姿。豊かに成長した乳丘は吾朗に転がされて、むき出しの淫裂ではまだ里英の指先が動いている。零児がさらにそこに食いついて処女の愛液を啜っている。それでいて里英は上目遣いに和馬だけを見つめてくれる。あのぽってりとした唇に挟まれて自分の陰茎が出入りしているのだ。

推しアイドルは男たちの快樂にこんなにも一途に献身してくれる。里英にこんな娼婦性が潜んでいたことに驚きを隠せなかった。

「里英、自分でも信じられないわ。みんなの前でオナニーしてとっっても興奮してる」
「ボクもだよ。里英に見られながらシコシコしてすっごく興奮した」

「里英といっしょに興奮してくれてうれしいの、おチンチンしゃぶってうれしいの。このまま気持ち良くなつて」

そう言って里英はまた肉棒を頬張った。秘丘をこねまわすピッチが上がっている。里英が上目遣いで気持ちを伝えてきた。和馬には里英が何を望んでいるのかわかった。里英はもうフェラチオに加減を掛けられない。里英は男をとことん味わいたいのだ。

プレゼントしたネックレスを揺らし、キュツとすばめた唇に肉幹が扱かれる。砲身全体から快感が押し寄せ、カリ首の辺りで最高潮を迎える。和馬は尻をつねって耐えた。「ジユボ、ジユボ、ンフンツ、ンフンツ」

肉茎を吸う音に混じって、里英の吐息が漏れる。里英自身もときおり震わせて快感が高まっているのが伺えた。里英がじっと和馬を見つめた。上目遣いのアイコンタクトで、いいよ、と言っていると感じ取った。

すべてを受け入れてくれそうな里英の顔を見た瞬間、限界を超えて耐えていた射精感が一気にこみ上げた。輸精管を通り抜けて精液が噴出する。いままでの射精のなかでも最高とも思えるほど大量の粘液が快感と共に流れ出ていく。

「ングうん、んんんっ」

ザーメンを受け止める里英もまた同時に身震いさせている。零児の口を振りほどくほど大きく腰を跳ねさせた。オーラルながら同時に絶頂を迎えられた喜びに打ち震える。里英は快感で震えさせながらも歯は立てずにしっかりと雄の汁を口のなかをいっぱいに

含んでいる。

ゆっくりと味わうように里英は和馬が出したザーメンを飲んでいく。献身的な奉仕に里英のためなら何でもできるし、応えてあげなければならぬと和馬は思った。

10.

「そうそうオジサンもプレゼントを用意してたんだよ」

吾朗が里英に手渡したのは白い紐ビキニだった。

ビキニに着替えた里英は吾朗の上に跨がらされて初めてのシックスナインを経験した。性器のなめ合いは風俗慣れした吾朗に分があった。おしゃぶりを続けられずに里英は顔を上げて啼かされた。なんども夢想した白ビキニ姿であえぐ推しアイドルの姿はあまりも悩ましかった。

ムクムクと勃起してしまい、和馬と零児はまた口でヌイてもらった。吾朗の顔面に跨がって甘い声を漏らしながら、肉竿二本を交互に奉仕する里英もまた淫らだった。

——里英に風俗みたいなことさせやがって。

「いいよ、里英ちゃん。しっかり挟んでごらん。おっぱいの使い方をしっかり覚えような。里英ちゃんのおっぱいは男殺しの武器なんだから」

若者ふたりの二本ヌキが終わると、吾朗は里英にパイズリを仕込んでいた。白ビキニのあいだ、大きく成長したバストで吾朗の男根を包み込んでいる。唾液をこぼしてローション代わりにして、張りつめた乳肌に滑らせていた。

(里英はあなたの通う安風俗のピンサロ嬢じゃないんだぜ)

和馬のいらだちを知ってか知らずか、吾朗は飄々と里英にパイズリの作法を教え込んでいる。

「オジサンだって里英ちゃんの初めてをひとつぐらいただただかかないとな。へっへっ、シックスナインも初めてだったか」

お前だってファーストキスと初クンニをしただろう、と、そんなニヤけた顔で和馬に視線を送ってくる。零児はそんなことなどまるで気にならないようで、里英の背後にぴったりついて、太ももやらおなかやら、アイドルの柔肌を夢中でまさぐっている。

「吾朗さん、スゲえ眺めだぜ。おっぱいの谷間からチンチンが出たり入ったりしてる」

零児は吾朗に心酔したような声を上げた。アイドルのパイズリはどこから見ても淫靡なのだが、里英の背、斜め上から覗ける姿もエロティックだった。乳房のあいだに割って入った怒張が出入りを繰り返し、突き抜けた亀頭が迫ってくる。女の目線だとこんなふうに見えるのか。妙なところに感心してしまう。

「オジサンのチンチンはデカいだろう。こうして馴染ませねえと、里英ちゃんも怖がっちゃまうからな」

テキトーな理屈をつけて、吾朗はアイドルのパイズリを満喫している。気持ちよさそうな声を出して極楽気分だ。

吾朗のイチモツは確かにデカい。かなりの巨根と呼んでよいだろう。Eカップを超えようかというほどに育った里英の豊乳でも包みきれず、貫き通している。吾朗がプレゼントした白いビキニは水着としては役に立たない安物で、パッドも入ってないから肌が透けているし、ツンと屹立^{きりりつ}した乳首が三角布を持ち上げている。吾朗は両の乳首を摘まんで、こう動かすんだ、と上下に引っ張って指導している。

「兄ちゃんたち、コレを使いな」

吾朗に手渡されたのはピンクローターだった。風俗に寄ってきたと言っていたがこんな淫具まで持ち歩いていたのか。

零児がさっそくビキニショーツにあてがった。早熟な色香を放つ里英の魅力にはあらがえず、ムツとしていたのも忘れて和馬も柔肌にローターを触れさせる。おへそに当たったり、乳房の下から当たったり、あちこちに当たてみると里英はかわいい声をだした。

「……いやん、邪魔しないで」

「オトナのオモチャもはじめてなのかい？ エロマンガでよく出てくるだろう」

「はい……知ってはいたけど、使われるのははじめて。どうやって手に入れたらいいの

かわからないもの。ああん、くすぐったい」

パイズリをしながら、敏感そうに里英は見事なプロポーションを揺すった。

「なあ、こうしておっぱいを密着させるとチンチンと仲良しになれるだろう。こんどはもっと上手におしゃぶりできるはずさ。さあ、先っちょをペロペロしてごらん」

乳房のあいだから飛び出した亀頭はカウパー汁をピュツピュツと飛ばして肉丘を汚していた。里英はそこに舌を伸ばす。ついはむように口づけしながら、テカった王冠部をヌルヌルにしていく。

バージンのアイドルがするにはあまりに卑猥な姿だ。はさみこんだ乳肉でムニユムニユと扱きながら、里英はどうしてそこまでという一生懸命さで奉仕していた。

「アン……わたしすっごくエッチなことしてる。男の人がおっぱい好きなのってこういうことなんですネ」

「へへへ、おっぱいの楽しみ方はいろいろあるさ。なあ、オジサンのデカチンが愛しくなっただろう。またおしゃぶりしてもらおうか」

里英はこっくりと頷いた。初めてのパイズリ経験は里英を興奮させたのか、妖しく瞳を潤ませている。

吾郎はどっかりとあぐらをかいて、本腰を入れて里英のフェラチオ指導に取りかかった。

「もっと奥までしゃぶってごらん、里英ちゃんならできるはずだ。そうそうその調子」
「ツバをいっぱいに出して、音を立てるんだよ」

盛んに吾郎は指示を飛ばし、里英もそれに応えて実践してみせる。

吾郎の男根は太いが短い和馬と、長いが細い零児のを併せ持つ、すなわち太くて長い凶悪な逸品だった。カリ高でいかにも使い込まれたといった黒ずんだ色合いの肉棒を、里英はなかほどまで啜え込まされている。パイズリ経験で巨チンへの怯えも和らいだのだろうか。啜えるだけでも精一杯だった里英も次第、次第に深く啜えられるようになってきた。

里英のプックリ唇で口唇ピストンを受ければ和馬も零児もほんの数往復で追い込まれたのに、吾郎は余裕綽々だ。あの必殺の上目遣いで見つめられてもまるで動じない。

里英の奉仕はますます淫らになっていく。

「ンフン……ンハン……」

里英はおしゃぶりしながら悩ましい吐息を漏らす。里英のオーラル奉仕に負けない情熱で和馬と零児も里英の全身を愛撫していた。左右に分かれて和馬と零児は推しアイドルの肢体をなで回している。首筋から白ストッキングに包まれた足指に至るまで里英の肌という肌を舐め回し、零児にいたっては脇の下にしつこく吸い付いて里英に悲鳴を上

げさせてもいる。

水着といっても紐ビキニは緩く結ばただけだ。隙間からいくらでも覗けるし、簡単にめくり返すこともできる。なんどもオカズにしたあの白ビキニはただ生で鑑賞するだけでも興奮が沸き立つのだ。めくって乳首を露呈させたりまた戻したり、紙面では絶対できなかった男の夢を果たしている。

「里英、また見てもいいかい？」

後ろに回った和馬は里英が口を塞がれていると知りながら尋ねる。里英が恥ずかしげにお尻を振った。

後ろ姿もなんとも悩ましかった。上体を深く沈ませているから自然とお尻はあがり、鼠径部の周囲がすべて見通せるのだ。ずれまくったビキニシヨーツからは恥毛がはみ出ている。白ビキニから飛び出した黒い陰毛だけでも何度だってヌケるオカズになるだろう。布を絞ってTバック状にしたり、股間に食い込ませてマン筋を立てたり、着エログラビアみたいな夢幻の姿を好き放題にできた。

成長しているのはバストだけではなかったようで、熟れごろといった様子の尻肉をムニムニと揉みながらSS席以上の特等席で観賞する。尻たぶを広げてアイドルの股間をじっくりと眺めた。

「すごくエッチだよ、里英」

ビキニの股布が波打っている。里英はまた秘部を弄いじっているのだ。布一枚でも大胆に

なれるようで里英の手淫はますます遠慮がなくなっている。中指だけでなく人差し指や薬指も使って淫裂をなぞっていた。

和馬は股布をめくりあげた。里英は人差し指と薬指で器用に割れ目を広げながら、中指で淫核を転がしている。つぼみのようだった処女の肉花も長時間の自慰で花卉が開き、濡れた桃色の粘膜まで覗けていた。そこも本当にキラッキラツツしていて宝石箱みたいだった。

男が思うより女の入り口は下にあるとよく言われるが、お尻を上げたこの体勢ではそんな秘密の部分でさえ見やすくなっている。なにしろお尻の穴だって丸見えなのだ。

菊蕾から数センチ、肉ビラの付け根に乙女の入り口はあった。膣肉で埋まり閉じてはいるものの、里英の指先に合わせてよれているのが見て取れる。和馬の視線を感じて、手で遮るのだが、指先はまだ動いたままだ。膣口を指でなぞるから神秘の肉道の位置がはつきりとあからさまになってしまう。

和馬が吸い付くと、里英は指をずらして舐めさせてくれた。

（里英の処女の部分を舐めてるんだ）

和馬が最初にそこに口を付けたとき、舐めていたのはほんの外側だったことがいまなら理解できる。膣前庭の粘膜はとても敏感でピクピクと反応し、集中的に舐めると膣の入り口からラブリュースが絶えず流れ出てくる。思い切って舌先を潜り込ませても、処女膜はもっと深い部分にあるようで、和馬は淵にそって舌を回した。穴といっても媚肉

で詰まっっていてこのなかに突き入れたらどれほどの快楽が得られるのか想像に難くない。「ンフンッ……ンフンッ……」

里英も感じているのだろうか。興奮の連続で和馬はおかしくなりそうだ。すくなくとも分身は役に立たなくなっている。

何しろ三度の射精は一発、一発が、自慰とは比べものにならないほどの爆発的な快感だった。栓が壊れてしまったようで粘液がタラタラ流れて止まらなくなっている。そのせいか半勃起状態からそれ以上硬度が上がらない。ときどきピクピクとペニスに刺激が走り、ドロツとした粘液が溢れるのだが、射精しているのかもしれない。自分でも定かでないほど股間が熱くなりっぱなしだ。

こんな快楽があるからアイドルが性器を突き出した姿を見ても挿入する気にならないほど十二分に満足していた。恐らく零児も同じ思いだろう。

「アフンッ、アアンッ……」

その分里英を口で愛した。押しアイドルにもっと気持ち良くなって欲しい、その一念で秘肉を舐め抜くと、控えめながらも里英は軽いアクメに達したようで痙攣させた。処女の穴まで収縮して震えている。里英が悦んでくれたのがとても誇らしい。舌先が締め上げられ、そして愛液が湧いてくる。唇をじっと押し当てて、一滴も逃さずように絶頂の雫を飲み干した。

顔を上げるとオレにも舐めさせると、すぐさま零児が代わって後ろに陣取った。

「里英、お尻もオマ○コも丸見えだぞ」

イヤン、と里英の声が聞こえる。

零児は吾朗に感化されたのか、ヒーローを返上して美少女アイドルの羞恥を煽る。里英は好きにすればいいとでもいうように腰をくねらせてから、お尻を持ち上げる。

「こないやらしい格好をして。他のヤツだったらとっくにハメられてるぞ」

「ああん、里英を困らせないで、零児さんを信じてるから里英のぜんぶを見せてるのに。

こんな格好するのは今夜だけ。零児さんが大事にしてくれて里英はうれしいの」

「どこを大事にしてほしいのか言ってくれよ」

零児は手淫をする里英の手を握って止めさせてしまう。勘のいい里英のことだ。零児が何を言わせようとしているのか察しはついているだろう。後ろを振り向いて赤らめた顔で誘うのだが、零児はどうしてもアイドルに言わせたいのか納得しない。ラビアをピンピンと弾いて里英に迫る。

「言ってあげなよ。いいじゃないか」

そう吾朗にうながされると里英は観念したように口を開いた。

「オ、オマ○コ……。里英のまだバージンのオマ○コ大事にして」

「ここだろう、ここを大事にしてほしいんだろう」

「そうよ、里英のオマ○コを口で塞いで、やさしく舐めてエ」

「ああ、わかったぜ。もう二度と変な気を起こさないように、エッチな汁をぜんぶ吸っ

てやるよ」

「あはんッ……里英のバージンのおつゆ残らず吸われちゃう」

アイドルには禁断の四文字を引き出すと、零児はわざとらしく音を立てて媚肉を吸った。焦らされた上にいやらしいセリフを言われたのがつらかったのか、里英は鋭角にお尻をキュッとあげて舐めやすくしている。

「おい、おクチが休んでるぞ、オジサンにもサービスするんだ」

「吾朗さんごめんなさい。オマ○コ舐められながら、オジサンのおチンチンおしゃぶりします。アウンッ」

吾朗にも卑猥な言葉を告げて、フェラチオを再開させた。清纯派のアイドルに似つかわしくない淫語を言わされながら、里英は明らかに昂揚を覚えている。言葉責めにされながら感じる里英を見ているとある性癖が思い浮かぶ。

「里英ってマゾっぽいよな」

和馬は思わず口にしていた。

「もう、なんでそんなこというの、和馬のバカア」

従順に男の快樂に仕えていた里英が珍しく怒ってみせた。だが、すぐに里英の口は怒張で塞がれてしまう。恋人のように接していた和馬にまで言われたのがよほどショックだったようだ。そして凶星だったらしい。

里英の反応はさらに変化した。零児に「オレもマゾっぽいと思ってたんだ」と追い打

ちを掛けられ、軽く尻をはたかれると、ブルツと背筋を震わせた。

「マゾでいいじゃないか、男はマゾっぽい女が好きなのさ」

「ングウツ、ングウツ……」

吾朗は里英の黒髪を掴んでねじり上げると、グイグイと肉柱に沈めた。乱暴にほとんど口を犯されているという状況である。それでも里英は懸命に受け止めていた。乳肉を揉みくちやにされ、むごく口内に含まされて苦しげに呻きながらも、ムフン、ムフン、と悩ましい声も漏らしていた。

なんとという被虐美だろうか。

バージンのまま、清らかさを失わないまま——。それでいてアイドルはマゾヒズムにも目覚めようとしていた。和馬も里英の肌に吸い付いて、くびれた腰や揺れる背中にキスの雨を降らして、新たな快感を少しでも高めてやる。

「彼氏のことナイショにしてほしいよね。里英ちゃんアイドルでいたいもんね？」

「……ナイショにしてください。オジサンの精子いっぱい飲むから、ぜったいにナイシヨにしてえ」

ワルオジになりきった吾朗に淫らなおねだりを言わされながら、里英はスロートを加速させる。サディステイックに責められながらも一途さを失わずに里英は奉仕に没頭した。

——あんなに深く啜えて。

きっと吾郎は和馬より深い快感を味わっているに違いない。思わず嫉妬し、里英をもっといじめたくなった。

「里英、さっきから夢中でおしゃぶりしてるじゃないか。そんなに中年オヤジのチンチンがおいしいのかよ」

耳元に顔を近づけて和馬も里英を言葉でいじめた。口唇奉仕を続けながらチラリとこちらを一瞥する。恨みっぽい視線にはゾクゾクするような色香があった。寝取られて喜ぶ男の屈折した性癖が和馬にも理解できた気がした。

吾郎もいよいよ性感が高まったようだ。里英の頭を押ししてさらに深く沈めている。里英はもう巨根の大半を飲みこんでいた。強く吸い付かせ、ぽってりとした唇がめくりかえる。唇の裏の違ったピンク色が時折、垣間見えてエロティックだ。和馬はほつれた里英の髪の毛をかき上げて、口唇奉仕に耽る推しアイドルの横顔に見とれた。

「出してあげるよ、ほら、精子欲しいんだろう」

しゃぶりながら里英はなんともうなずく。

吾郎が唸った。発作は凄まじかった。逃がさぬとばかりに吾郎は里英の後頭部を押さえ込んだ。里英は受け止めきれずに口の端から白濁液が漏れ出している。和馬の半勃起男根からも粘液がタラタラと垂れていた。零児がかぶりついている里英の尻肉も震えている。里英は精飲しながらまたも達したのだ。

セックスしていないのに、和馬も零児も吾郎も、そして里英も——。それにも勝る一

体感で恍惚を迎えていた。

第二部 夜会の真相、そして――

第五章 アイドルだって誕生日にオトナになりたい

11.

都心近くにある西宮里英のマンション。1DKのこぢんまりとした部屋を四つのエリアに分割して、テレビや座卓のある食事スペース、ベッドスペース、小物置き場、そしてSNSライブ用の配信スペースに使い分けしている。

夜更け過ぎに帰宅した里英は、照明を落とした室内で配信スペースの壁を背に丸椅子に座っていた。

里英の前にはライブ配信で使うスマホスタンドではなく、高解像度撮影が可能な大型の業務用カメラが設置されている。里英を照らすライトもリングライトではなく業務用の本格的なものだ。指向性のガンマイクまで向けられている。

カメラの前に座る里英はほぼ全裸だった。深夜の誕生日会で身につけていたクリームイエローのランジェリーはかろうじて体に纏わり付いている。ブラジャーはただ肩に掛かっているだけだし、ショーツも右の太ももに引っかかっているだけだ。これが誕生日会のあとだとあえて痕跡を残すために完全に脱がさずに行っているようであった。和馬と

零児にプレゼントされたネックレスとイヤリングも身につけたままだ。

「アン……わたしまたイツちゃう」

なにやら黄色い器具をむき出しの股間に自ら押し当てる里英からひっきりなしに淫らかな声が溢れている。

配信用にしているだけあって壁にはライブで熱唱する里英の写真パネルや『R i e』と筆記体で形作られたネオンライトが飾られている。アイドルであることをありありと物語る装飾品の前だけにオナニーに溺れる里英の姿はあまりに淫らだった。

ギユウン、ギユウン――。

アアンツ、アハンツ――。

（試し読み版はここまでです。続きは製品版をご購入ください）

推しハメ！ 絶対ナイショのアイドル極秘誕生会の真相（試し読み版）

著者 妄想虜囚

サークル 妄想虜囚

発行日 二〇二三年五月二十日

連絡先 <https://ci-en.dlsite.com/creator/5672>

mousouryosyuu@gmail.com

[@m_ryosyuu](https://twitter.com/m_ryosyuu) (Twitter)

カバーイラストは神楽あき氏作「デザイン背景素材集：03 アイドル」を元に作成しております。

※本作はフィクションであり、実在の人物、団体などとは一切関係がありません。

※本書の無断転載・複製・複写・インターネットウェブサイト上への掲載は固く禁止致します。